書き抜き読書ノート 2413	2021 年 6 月 30 日

木原武一著「天才の勉強術」新潮社 1994 年 6 月 1 日刊を読む

天才の学び方（４）ナポレオン

ナポレオンは自らの仕事ぶりについてこんなふうに言っている。

・「せっせと仕事をし、じっくり考える。
何かを企てる前に長い間よく考え、どんな事態になるかを予測。天分がだしぬけに現れるのではない。夕食のときでも劇場でも、いつも仕事のことを考えいつも働いている。夜も目がさめると仕事をする。私は働くために生まれついたのだ。」

・「仕事をする能力とは、目前の仕事を即座に片づける能力である」

・ナポレオンの生涯は、「不可能への挑戦」
凡庸な軍人や政治家が尻込みするようなところに彼は前進した。普通の人間が不可能を可能にする。

・「天才の秘訣=読書」
今も昔も最強の勉強方法は本を読むことに尽きる。できるだけ多くの本を、そして、できるだけ広範囲の分野の本を読むことである。
天才と言われる人びとは、生まれつき何か不思議な能力を与えられていたわけではなく、たくさんの本を読んで、頭の中にたくさんの知識をたくわえて、世界で遭遇する未知の現象にそなえ、いままでだれも気付かなかった真理を発見することができた。

・ドイツの哲学者「ショーペンハウアー」は、「読書とは他人にものを考えてもらうことであって、本ばかり読んでいると頭脳のはたらきが鈍くなる」といっているが、いったい、本を読んで何も考えずにいるなどということがありうるだろうか。たいていの人は、本を読めば必ず何かものを考えるはずであり、ものごとを考えることで刺激を与えられた頭脳は、思いがけないすばらしい働きを発揮するにいたる。

・ナポレオンは幼年時代から生涯の最後にいたるまで、貪欲な読書家であった。特に読書に集中したのは、パリの陸軍士官学校を卒業して軍隊に勤務した 16 歳からの数年間である。この時期に集中的な読書習慣を身に着けた者は生涯読書から離れられない。ナポレオンは「本屋の本を食いつぶすほど」本を読んだという。

・それも専門の戦術書や砲術書だけではなく、歴史・地理・法律・数学・文学とあらゆる分野にわたっていた。

・ここで大切なのは、彼は手あたりしだいに本を読みとばしたのではなく、要約や抜粋、感想などを記した克明な「読書ノート」をつくっていたことである。

・書くことによって、いっそうよくものを考えることができる。ものを考える最善の方法はものを書くことであり、読書は次善の策だとしたら、本を読んで、読書ノートを記すことこそ、まさに最良の勉強方法にちがいない。
・ナポレオンが戦場においても一国の統治においても、人々を驚嘆させるような能力を発揮できたのは、判断力をきたえ、莫大な量の情報を貯えさせた旺盛な読書によるところが大きかったのではあるまいか。ナポレオンの天才の秘訣は読書にあった。
・ナポレオンにとって読書は、軍事や政治に役立っただけではなかった。歴史家や伝記作家の評価によると、彼は当時のもっとも学識と教養のある人物の一人でもあった。同時代の人々も彼の学識を高く評価していた。その証拠に、1797 年、まだ権力を握る前にナポレオンはフランス学士院の会員に選ばれている。本人が何よりも誇りにしていたのは、軍人としてではなく、文人として認められたことであった。軍隊への命令書などにも「フランス学士院会員」とかならず記入するほど、この肩書きを名誉に思っていた。追放されて最後の 6 年間を過ごしたセントヘレナ島でもよく本を読み、その書庫には 3000 冊以上の本が所蔵されていた。

P82 ～ P98

＜コメント＞

「モーツァルト」「ニュートン」「ゲーテ」「ナポレオン」と、天才といわれる人々の勉強の仕方は参考になります。「深く狭く」と「広く浅く」のバランスこそが肝と考えます。

2021 年 7 月 9 日林明夫記